

学校食育研究部

1 研究主題

「豊かな心とじょうぶな体で、たくましく生きる子どもの育成」

～自らの健康を考え、主体的に取り組める食に関する指導のあり方～

2 研究主題について

「食育」は、さまざまな教科・領域、および学校生活すべてにその切り口が存在し、多様な学習が展開される可能性を持っている。また、「学校給食」は、学校における食育の実践の場であり、望ましい食にふれる大切な機会である。

児童が自分の食生活に関心をもち、「食事のあり方」に対する理解を深め、実践を通して「望ましい食生活」を身につけることは、生涯にわたって食の自己管理能力を育成することと深く関わっていると考えられる。

学校給食は、「食べる」という人間の基本的活動であると同時に学級集団として組織的な実践活動を通して、好ましい人間関係を形成する場でもある。児童が互いに協力し合って給食の準備から後片付けまで自主的に行うことや、会食にふさわしい環境づくりをすることなどから、働く喜びを感じ取ることができる。

また、友達や教師と同じ場所で同じ食事をとることで、親密感や思いやりの心や仲間意識が生まれてくる。さらに、給食に携わる人々を理解することによって、食事ができることへの感謝の気持ちが培われ、豊かな心が育っていくと考える。

そのためには、児童の実態に即した的確な計画のもとに、「食に関する」知識を身に付けるだけでなく、知識を望ましい食習慣の形成につなげられるような具体的な活動を通して、実践的な態度を育てていくことが重要である。

そこで、各教科・領域、給食の時間等、あらゆる活動の有機的な連携をもって研究を進めていく必要があると考えた。

3 研究方法

(1) 専門委員会

○学習研究部

研究テーマに迫るために、日々の給食時間のみならず、時間割の学級活動の時間・各教科や道徳・行事・総合的な学習の時間等、あらゆる活動場面を指導の場として研究をした。

本年度は、帝京平成大学講師 西村美智子先生の講演会や授業提案を行い、食育の考え方を学んだ。また、コロナ禍の給食指導の悩みを共有するために情報交換を毎月行った。

昨年度より市研会員の募集方法や研究方法が大きく変更になったため、授業公開は、行わなかった。

第二次研究大会

保土ヶ谷区 星川小学校 石井 陽子 教諭
生活科 1年 「なかよしいっぱいだいさくせん」

○資料作成部

本年度は、学習研究部とともに、授業提案を行った。また、市研だよりを作成して、毎月の招請状とともに会員に送った。

4 年間活動報告

月	日	内 容
4	21	企画会 今年度の研究の取組
6	16	本年度の研究の進め方について 学習研究部による授業提案
7	7	講演会 帝京平成大学講師 西村美智子先生によりご講演
9	8	感染症拡大防止のため中止
10	6	感染症拡大防止のため中止 (区一斉研授業研指導案相談は企画会内で行った)
11	10	授業提案 情報交換 (区一斉研授業研指導案相談は企画会内で行った)
1	12	企画会 第二次研究大会準備
2	9	第二次研究大会 (紙面にて)
3	9	本年度の反省と来年度の計画

5 研究の成果と課題

子どもたちの生涯にわたっての健康な心と体の育成をめざし、本年度もそれぞれの学校や学年・学級の実態に応じた題材での実践例を取り上げて、研究を進める計画を立てた。しかし、感染症拡大予防の影響で様々な変更が生じた。9月からの分散登校や、黙食の定着、配食方法や喫食方法の大幅な変更など、今までの積み重ねてきた給食指導が根底から覆った。本研究会でも研究内容を再考し、コロナ禍であってもできること、やるべきことを計画した。

本年度は食育の指導案の書き方や食育年間計画の作り方を伝え、食育の授業提案を通して授業作りの研究をした。

まず、7月に食育の基本となる考え方を帝京平成大学の西村美智子先生の講演を通して学んだ。会員の中には食育の指導案を書いた経験のない方も多く、どのような視点で授業を作っていくのかを伝えることができた。同時に、食育年間計画を見ながら、他教科との関わりを考えることもできた。また、2回の授業提案を行うことで、授業の進め方や展開のポイントを考えることができた。11月の6年国語の授業提案では、季節の食べ物から旬の食べ物に着目することができた。実際に参加者は俳句作りも体験して、食育の授業のイメージを膨らませることができた。

今年度は集合研修の開催が難しかったが、少ない回数の中でも食育に関心をもつ会員の方とコロナ禍での食育への理解を広げることができたと考えている。

本年度の活動を基にして、来年度は多くの実践を行い、研究会からさらに発信していきたい。